

ライティングの力を構成するさまざまな能力

著者	田中 俊也, 砂山 琴美
雑誌名	関西大学高等教育研究
巻	4
ページ	1-8
発行年	2013-03-28
URL	http://hdl.handle.net/10112/9772

ライティングの力を構成するさまざまな能力

田中俊也
砂山琴美

要旨

本研究では、自分自身が認知しているライティングの力と、それに関連する諸変数間の関係を、主に共分散構造分析の手法を用いて分析し、ライティングにまつわるさまざまな心理的要因相互の関わりを検討した。

被調査者は大学生 123 名であった。質問項目は、大きく 4 つの尺度から構成された。普段からちゃんと物事を考えたり、それを楽しんだりする動機づけがどの程度あるのかを測定する「認知欲求」、社会的場面における自己制御能力を測定する「社会的自己制御力」、対人コミュニケーション力のうちの「自己主張」、「他者受容」、「関係調整」の力、それに「認知されたライティング力」であった。

分析の結果、ライティング力には認知欲求の高さが直接的に影響を及ぼしていること、認知欲求は、自己制御力と相まって対人コミュニケーション力に影響を及ぼし、まわりまわってそれがライティング力に影響するというルートも見出された。

キーワード： ライティング、認知欲求、自己制御、対人コミュニケーション、共分散構造分析
writing, cognitive needs, self-regulation, interpersonal communication, SEM

はじめに

文章を書く力は、生きる力に繋がる。

直接的な相手との「語り」が主要なコミュニケーション手段であったころには、「書く」ことはそれほど重要なことではない。相手との時空の共有によって、そこでの語りの「メッセージ」部分は、その時空の共有にともなう文脈性によって内容が補われ、いわゆる「言わずもがな」の状況がうまれる。文脈がメッセージを語ってくれ、「沈黙は金」というアフォリズムすら登場しうる。

ところが、今日のような知識情報基盤社会においてはそうはいかない。コミュニケーションの時空は分断され、メッセージはメッセージでのみ完結する必要に迫られる。人間の記憶力の限界からも、伝えたいすべてのメッセージを一気に語ることはできない。ここに「書く」という手段が登場する。

そのためには、情報の取捨選択、その構成や創造、新たな情報の発信等は、そうした社会の中

で生きる者にとっては不可欠な要件となる。脱文脈化の中でのメッセージの完結性の要求である。

若い人たちがこれから参入していこうとする社会はまさにそうした社会であり、そうした社会人になるための、基礎的力としての「書く」力に代表されるそうした能力の育成は、大学教育にとっても 1 つの重要な教育目標となる。「生きる力」の教育の一環である。

本稿では、そうした、情報の取捨選択、その構成や創造、新たな情報の発信等を書く力と定義し、日本語での「書く」という表現からくるイメージの制約から解放するためにそれを「ライティングの力」「ライティング力」と定義し、それに関連するいくつかの能力や資質・力量との関連を見ていくこととする。

ライティングの力はパフォーマンスとして表に現れる場合もあれば、その自覚・認知という形で必ずしも表に現れない形もとりうる。本研究では、教師や他者がパフォーマンスをアセスメントした結果としてのものではなく、後者の、自分で

自分をどのように認知しているか、という形でライティング力を定義する。

ライティングは、自分で自分をみつめ、統制した結果としての、自己の表現形態であると同時に、それは、他者とのコミュニケーションを前提としたものでもある。そこで、それらも変数として扱うことにする。

さらにそうした力は、一般的に、ものごとをきちんと考えたり関わったりしようとする個人の認知欲求特性とも関連すると考えられる。

こうした、認知欲求の強さ、自己統制力、対人コミュニケーション力、ライティング力の関係を検討する。

諸変数間の関係は、基本的に相関係数の大きさ（0～1）、方向（+または-）で検討することができるが、それは因果関係を意味しない。そこで、本研究では、因果性に言及できるモデルから、その構造を探索的に探っていくことを目的とする。

方 法

1. 対象

関西地区の私立 K 大学、123 名（男性 48 名、女性 75 名）を対象に調査が実施された。

2. 調査期間

平成 24 年 11 月上旬から 11 月下旬。

3. 調査票の構成

自己制御力、対人コミュニケーション力、認知欲求、ライティング力を測定する質問項目は以下のとおりである。それぞれ項目の後ろの●印は反転項目であることを示す。また、項目番号は実際の調査票で用いられた番号であり、特に意味はない。

認知欲求

本尺度は、神山・藤原（1991）が Cacioppo & Petty（1982）の作成した 34 項目からなる「認知欲求尺度」を翻訳し、翻訳した尺度の信頼性・妥当性を検討し日本人に合うように作成し直された 15 項目からなる認知欲求尺度の日本語版である。どれだけ普段からちゃんと物事を考えたり、それ

を楽しんだりする動機づけがあるのかを測定する際に用いられる。本尺度は以下の 15 項目で構成されており、そのうちの 8 項目は反転項目である。各項目に対して「7. 非常にそうである、6. そうである、5. 少しそうである、4. どちらでもない、3. あまりそうでない、2. そうでない、1. 全くそうでない」の 7 段階で評定してもらい、それらを 1～7 点で得点化した。

質問項目は以下の通りである。

【 質問項目 】

1. 長時間一生懸命考えることは苦手な方である。

●

2. 課題について必要以上に考えてしまう。

3. 深く考えなければならないような状況は避けようとする。●

4. 自分の人生は解決しなければならない難問が多い方がよい。

5. 問題の答えがなぜそうなるのかを理解するよりも、単純に答えだけを知っている方がよい。●

6. 常に頭を使わなければ満足できない。

7. 一度覚えてしまえばあまり考えなくてもよい課題が好きだ。●

8. 一生懸命考え、多くの知的な努力を必要とする重要な課題を成し遂げることに特に満足を感じる。

9. あまり考えなくてもよい課題よりも、頭を使う困難の方が好きだ。

10. かなり頭を使わなければ達成されないようなことを目標にすることが多い。

11. 必要以上に考えない。●

12. 考えることは楽しくない。●

13. 自分が人生で何をすべきかについて考えるのは好きではない。●

14. 簡単な問題よりも複雑な問題の方が好きだ。

15. 新しい考え方を学ぶことにはあまり興味がない。●

自己制御力

本尺度は、原田・吉澤・吉田（2008）によって作成された、社会的自己制御（SSR：Social Self-Regulation）を測定する尺度である。自らの

行動を調整する能力である自己制御のうち、とくに社会的場面における自己制御能力を測定する際に用いられる。本尺度は、自己主張、持続的対処・根気、感情・欲求抑制という3つの因子を含む、以下の29項目で構成されており、そのうちの8項目が反転項目である。各項目に対して「5. よくあてはまる、4. ややあてはまる、3. どちらともいえない、2. あまりあてはまらない、1. まったくあてはまらない」の5段階で評定してもらい、それらを1～5点で得点化した。

質問項目は以下の通りである。

【 質問項目 】

<自己主張>

- 4.先生から不当なことを言われても黙っている。●
- 7.やりたいことに自分から進んで参加できる。
- 9.友達の考えに流されることなく、自分の考えを言うことができる。
- 12.自分が正しいと思っていることでも、人から「間違っている」といわれる可能性があるときは何も言わない。●
- 13.多数派の意見とは違っても自分の意見を言う。
- 17.話し合いの場で、進んで自分の意見を述べる。
- 22.嫌なことを頼まれたとき、嫌だという気持ち伝えることができる。
- 23.友達が嫌がらせや悪ふざけなどをしているときでも、よくないと伝えることができない。●
- 25.仕事・課題や遊びなど、周囲の人にいちいち聞かずに、自分のアイデアで進めることができる。
- 26.順番に並んでいるときに横から入り込んでくる人がいたら注意をする。
- 27.周囲の人と自分の意見が違っていても、自分の意見を主張する
- 28.たとえ言いにくくても、間違っていることは指摘できる。
- 29.自分が考えていることを相手にわかるようにはっきり言う。

<持続的対処・根気>

- 1.皆でやるべき課題があるときは、遊びたい衝動に駆られても我慢できる。

- 3.やりとおさなければならない仕事があるときは、どんな誘惑があっても最後までやりとおすことができる。

- 6.やりたくないことや興味のないことは、皆と一緒にやらなければならないときでもサボってしまう。●

- 15.困難なことでも、集中して取り組む。

- 16.周りから決められた役割が困難なことでも、すぐにあきらめたりせずに、我慢してやりとおす。

- 19.集団のなかで、自分の決められた役割があるときは、どんな誘惑にも負けずに取り組む。

- 20.面倒くさいことは人に押し付ける。●

<感情・欲求抑制>

- 2.自分がされて嫌なことは人にもしない。
- 5.相手から不快なことを言われても、自分の感情を露骨に表したりはしない。
- 8.納得のいかないことがあったとき、すぐにかんしゃくを起こしたりせず、落ち着いて話すことができる。
- 10.友達から間違いを指摘されたら、素直に自分が間違っていたことを認める。
- 11.自分の考えだけを聞いてもらおうとするのではなく、相手の考えも聞いて、分かってあげようとする。
- 14.自分が気に入らない人には、つい過剰に注意をしたり、文句を言いすぎたりしてしまう。●
- 18.自分の意見を否定する相手の意見を受け入れることができない。●
- 21.嫌なことがあっても、人やものに八つ当たりをしない。
- 24.自分の思い通りに行かないと、すぐに不機嫌になる。●

対人コミュニケーション力

本尺度は、藤本・大坊（2007）が言語および非言語による直接的なコミュニケーションを適切に行う技能であるコミュニケーション・スキルを測定するために作成した尺度である。「自己統制」、「表現力」、「解読力」、「自己主張」、「他者受容」、「関係調整」という6つの下位スキルが測定でき

る。本研究では、後者の3つの対人スキル尺度(「自己主張」、「他者受容」、「関係調整」)のみを使用した。各尺度は4項目から構成されており、以下の全12項目である。各項目に対して「7. かなり得意、6. 得意、5. やや得意、4. ふつう、3. やや苦手、2. 苦手、1. かなり苦手」の7段階で評定してもらい、1～7点で得点化した。

質問項目は以下の通りである。

【 質問項目 】

<自己主張>

- 2.自分の主張を理論的に筋道を立てて説明する。
- 6.会話の主導権を握って話を進める。
- 8.まわりとは関係なく自分の意見や立場を明らかにする。
- 11.納得させるために相手に柔軟に対応して話を進める。

<他者受容>

- 3.友好的な態度で相手に接する。
- 5.相手の意見をできるかぎり受け入れる。
- 7.相手の意見や立場を尊重する。
- 10.相手の意見や立場に共感する。

<関係調整>

- 1.人間関係を第一に考えて行動する。
- 4.感情的な対立による不和に適切に対処する。
- 9.人間関係を良好な状態に維持するように心がける。
- 12.意見の対立による不和に適切に対処する。

ライティング力

本尺度は、井下(2008)を参考に本研究のために、自分の書く力を個々人がどれだけ認知しているか(ライティング力認知)を測定するためにオリジナルに作成したものである。本尺度は、以下の5項目から構成されている。各項目に対して「6. そう思う、5. ややそう思う、4. どちらかというと思う、3. どちらかというと思わない、2. あまりと思わない、1. 全くと思わない」の6段階で評定してもらい、1～6点で得点化した。

質問項目は以下の通りである。

【 質問項目 】

- 1.レポートや論文などを書くことに苦手意識はない。
- 2.ノートには板書だけではなく、自分なりの補足説明やメモも書く。
- 3.今まで、自分の考えを文章にして発表する機会が多くあった。
- 4.自分の意見や考えを、ちゃんと言葉で表現できる。
- 5.読み手側を意識して文章を書くことは苦ではない。

4. 手続き

大学の教職科目の授業時間中に調査協力を募った。第二筆者が調査について教示した後、質問紙を配布し授業終了後に回収した。それに加え、第二筆者のサークルや学部の友人にも協力してもらった。

結 果

1. 各尺度の内的整合性

認知欲求の高さを測定する15項目について、その内的整合性を確認するために α 係数を算出したところ $\alpha=.811$ と十分に高い値が得られた。これらの15項目で認知欲求の高さを測定する信頼性が確認できた。

さらに、今回は、ライティング力については、井下(2008)等を参考に独自に設定した項目であったので、その内的整合性が確認された。ここでは $\alpha=.762$ であった。

その他の項目については、既存の尺度をそのまま使用したので、特に尺度の内的整合性については改めて検討しないこととした。

2. 尺度間の相関

尺度間の相関をみたのが表1である。下位尺度を持つ自己制御力については、3つの下位尺度とすべて正の有意な相関がみられた。また、対人コミュニケーション力についても、3つの下位尺度とは高い正の有意な相関がみられた。

認知欲求、自己制御力、コミュニケーション力、ライティング力の間にはそれぞれ正の有意な相関がみられた。

表1 尺度間の相関

	認知欲求	自己主張	持続的対処・根気	感情・欲求抑制	自己制御力	対人的自己主張	対人的他者受容	対人的関係調整	対人コミュニケーション力	ライティング力
認知欲求	1	0.321	0.247	0.196	0.426	0.418	0.243	.175	0.354	0.532
自己主張	***	1	.034	-.174	0.49	0.695	.078	.141	0.394	0.421
持続的対処・根気	**	n. s.	1	0.26	0.713	.110	0.244	0.316	0.286	.162
感情・欲求抑制	*	+	**	1	0.597	.018	0.535	0.4	0.397	.081
自己制御力	***	***	***	***	1	0.465	0.474	0.474	0.6	0.373
対人的自己主張	***	***	n. s.	n. s.	***	1	0.265	0.397	0.715	0.519
対人的他者受容	**	n. s.	**	***	***	**	1	0.596	0.77	0.21
対人的関係調整	+	n. s.	***	***	***	***	***	1	0.861	.112
対人コミュニケーション力	***	***	**	***	***	***	***	***	1	0.354
ライティング力	***	***	+	n. s.	***	***	*	n. s.	***	1

3. 性別と各尺度得点の関係

表2は、各尺度での得点の男女差を検定した結果である。t検定の結果からは、どの尺度においても性差は得られなかった。したがって、性差はないものとして、以下の分析を行う。

表2 性差の検定

	男女の平均の差の検定		
	t 値	自由度	有意確率 (両側)
認知欲求	.018	120	.985
自己制御力	-.802	120	.424
対人コミュニケーション力	1.002	120	.319
ライティング力	-.480	120	.632

4. 因果モデルの検討

(1)基本的分析方法

上記4変数について、すべて観測変数と定義し、Amos20を用いて、標準化を経た共分散構造分析を行った。基本的には、「ライティングの力」を内生変数(従属変数)として扱うモデルと外生変数(独立変数)の一部として扱うモデルを考え、想定される因果性にパス図を書き込んだ。

その後Amos20の「探索的モデル特定化」の機能を利用して、主に χ^2 値を中心とした指標(BIC 0、BCC 0)での適合の良さを指標に2^{パス数}個の適合度結果から最適なものを2, 3抽出した。その際、想定した内生変数にパスが向かわないモデルは、それらの指標の値が適切(0により近いもの)であっても不採用とした。

その後、抽出したモデルで、改めて通常の分析手順に基づき、推定値、適合度等を算出した。

(2)ライティング力を従属変数としたモデル

認知欲求や自己制御力といった個々人の特性が

対人コミュニケーション力やライティング力にどのような影響をもたらすのか、について検討したのが図1である。

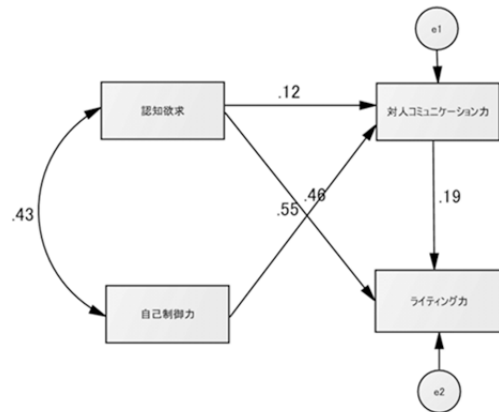


図1 ライティング力への影響

本モデルの適合性については、 χ^2 値の有意確率 .289, GFI=.995, AGFI=.954, CFI=.999, RMSEA=.032 であり、適切な適合度指標が得られたものと解釈できる。

認知欲求と自己制御力との相関は $r=.43$ であり、基本的に両者は相互に影響しあっている。

図1のパスは、認知欲求→対人コミュニケーション力以外は無意味な係数であった(認知欲求→ライティング力; .55, $p<.001$: 自己制御力→対人コミュニケーション力; .46, $p<.001$: 対人コミュニケーション力→ライティング力; .19, $p<.05$)。

ここから、ライティング力には、認知欲求から直接来るパスと、自己制御力が対人コミュニケー

ション力に影響を及ぼし、それが媒介してライティングに影響を及ぼすパスの2種類があることが分かる。

(3)ライティング力を独立変数の1つとしたモデル

ライティング力は、それがあることによって他の変数に影響を及ぼす、というみかたも可能である。その観点から、2種のモデルを検討した。

3-1 媒介変数モデル

図1と同様の変数間の配置を想定し、ライティング力が対人コミュニケーション力に向かう、という、コミュニケーション力をターゲットにしたモデルを検討したのが図2である。

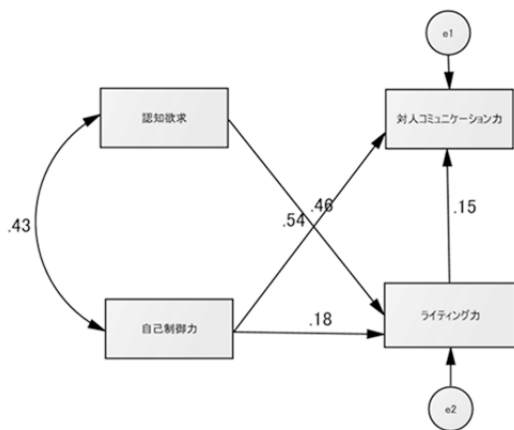


図2 ライティング力からの影響(媒介)

本モデルの適合性については、 χ^2 値の有意確率 .4789,GFI=.998,AGFI=.979,CFI=1.000,RMSEA=.000 であり、きわめて適切な適合度指標が得られたものと解釈できる。

図2のパスは、すべてのパスで有意な係数が得られた(認知欲求→ライティング力;.54、 $p<.001$: 自己制御力→対人コミュニケーション力;.48、 $p<.001$: 自己制御力→ライティング力;.18、 $p<.05$: ライティング力→対人コミュニケーション力;.15、 $p<.05$)。

この結果から、ライティング力は、認知欲求からの強い影響、自己制御力からの影響を受けてそれらの結果としてコミュニケーション力にも効果を発揮することがみてとれる。

3-2 直接モデル

図1, 2の、相関ありを前提とした外生変数の1つにライティング力を置き、そこからのパスを検討したのが図3である。

本モデルの適合性については、 χ^2 値の有意確率.148 で、これまでのモデルに比べて値が低く、適合性はそれほどよくはない。しかしながら、GFI=.992,AGFI=.916,CFI=.991,RMSEA=.095 であり、一定の適合度指標が得られたものと解釈できる。

ここでのライティング力と自己制御力の相関は.37で $p<.001$ で有意であった。

それぞれに引かれたパスを検討すると、認知欲求から対人コミュニケーション力へのパスが係数.12で、これだけは有意ではなかった。

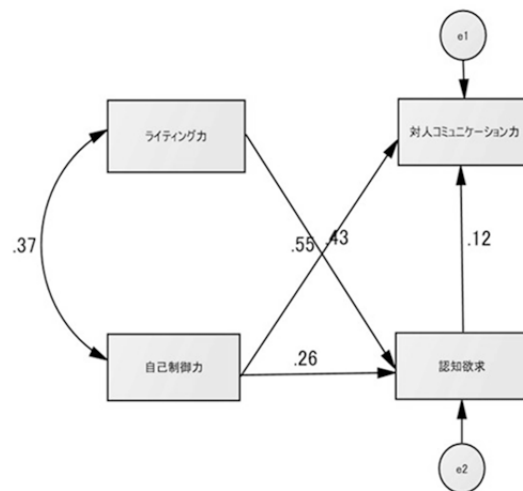


図3 ライティング力、自己制御力からの影響(1)

ライティング力から認知欲求へのパスは.55($p<.001$)、自己制御力から対人コミュニケーション力へのパスは.43($p<.001$)、認知欲求へのパスは.26($p<.001$)ですべて有意であった。

以上のことから、ライティング力は認知欲求へ直接的な影響力を持つがそれが媒介して対人コミュニケーション力につながるとは考えられないことが分かる。また、自己制御力は、認知欲求に対しても対人コミュニケーション力に対しても影響力を持つことがいえる。

図3の、対人コミュニケーション力と認知欲求間のパスを逆転して、最終的な従属変数を認知欲求に指定したモデルを探索的モデル特定化の手法で検討した結果が図4である。

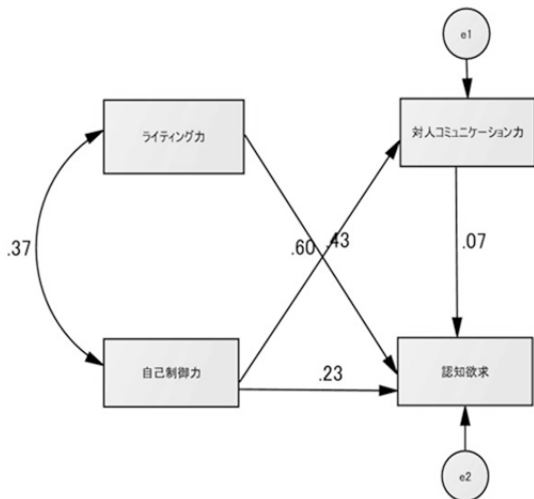


図4 ライティング力、自己制御力からの影響(2)

本モデルの適合性については、 χ^2 値の有意確率は.05で、適合性があるとは言いが、.05以上であることを前提に他の適合度指標をみたところ、GFI=.985, AGFI=.848, CFI=.977, RMSEA=.153であり、AGFIやRMSEAの値からも適切な適合度指標が得られたとは言えない。

しかしながら、参考程度に図4に言及すれば、ライティング力から認知欲求への係数、自己制御力から対人コミュニケーション力への係数は高く(それぞれ.60, $p < .001$: .43, $p < .001$)それぞれがダイレクトにそれぞれの力・能力に大きな影響を及ぼしていることがわかる。

考察

本研究で明らかになったことをまとめておきたい。

諸概念の関係 先ず、用いられた4つの概念間の関連である。認知欲求の強さ、自己統制力、対人コミュニケーション力、ライティング力の間にはすべて高い正の相関があり、互いに影響しあう、類似した概

念であることがわかる。

ライティング力を構成するもの 図1、2から明らかのように、ライティング力には認知欲求の高さが直接的に影響を及ぼしていることがわかる。認知欲求とは、上記質問項目で示されるように、ものごとを深く考え、そのことそのものを好む傾向の強さであり、これは対象へのコミットの動機、分析的関与の動機の強さを示すとも考えられ、これが自分のライティングの力についての認知に大きく関与していることがわかる。

一方で認知欲求は、自己統制力と相まって対人コミュニケーション力に影響を及ぼし、まわりまわってそれがライティング力に影響するというルートも明らかになった。ここで、自己制御力そのものがダイレクトにはライティング力に影響を及ぼさない、という点に注目することが重要であり、対人コミュニケーション力がライティングに影響しているという点も重要である。

ライティング力が生み出すもの 次に、ライティング力が他の要因にどのような効果をもたらすかについての検討を行った。

図3、4から明らかのように、ライティング力は単独には対人コミュニケーション力に影響を及ぼさず、認知欲求に対しては直接の影響をし、自己統制力からの影響と相まって対人コミュニケーション力に影響するが統計的には有意なものではなかった。

また、対人コミュニケーション力から認知欲求にパスを引いた場合(図4)も、ライティングから認知欲求へ、自己統制力から対人コミュニケーション力へという影響力のみが有意であり、認知欲求と対人コミュニケーション力との互惠性は確認できなかった。

総括 以上の諸結果から、変数間の影響力については以下のようにまとめることができる。

- ものごとを深く考え、そのことそのものを好む傾向の強さである認知欲求はライティングの力に影響を及ぼし、その逆も言える。したがって、認知欲求を高めるような教育的配慮・カリキュラムを組めばそれがライティングの力の形成にいい影響を与えるものと考えられる。

- 社会的場面における自己制御能力を測定する自

自己制御力は、外に向かう自己主張、現在の状態維持の持続的対処・根気、内に向かう感情・欲求抑制の力が含まれ、アサーティブなコミュニケーション力と結びつくと考えられるが、予想通り、対人コミュニケーション力には強い影響力を持っていた。これと認知欲求が相まって対人コミュニケーション力を形成し、それがライティングの力に影響を及ぼすことが明らかになったので、こうした自己制御力を、課外の活動等を通して養っていくことが回りまわってライティングの力の形成に寄与することが示唆された。

以上のことより、正課・課外の活動のカリキュラム構成・活動計画を精査していくことがライティングの力の形成に少なからず効果を持つ、といえる。

文 献

Cacioppo, J.T. & Petty, R.E. (1982). The need for cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 116-131.

原田知佳・吉澤貴之・吉田俊和 (2009). 社会的自己制御 (Social Self-Regulation) 尺度の作成—妥当性の検討および行動制御/行動接近システム・実行注意制御との関連—パーソナリティ研究、17, 82-94.

藤本学・大坊郁夫 (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究 15, 347-361.

井下千以子 (2008). 大学における書く力考える力—認知心理学の知見をもとに 東信堂

神山貴弥・藤原武弘 (1991). 認知欲求尺度に関する基礎的研究 社会心理学研究、6, 184-192.

菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店

*本研究は、第二筆者の 2012 年度文学部卒業論文「書く力はコミュニケーション力に繋がるのか—認知欲求、完全主義、自己統制から見る書く力とコミュニケーション力—」のデータをもとに、第一筆者が改めて分析しなおしたものである。